てにをは係辞辨

ホ2
4780

ホ 2
5635

和書 壹 冊 號 工

萩原先生著

てにをは係辞辨

出石居社蔵

[library seal]

抑ほとこそ世のかしこき学者やうこと
まつその御子の翁ほど係辞以てつまた
我その本居さとのまめ所々ふえなん
むかしよりのさまあなり写本と
それ福田ぬしの以つ写しかた中にし
こゝにそのけたるれしたる論ゆへとも
その時雄洋はふかれ出ふへ
ひとえにそ七えこくおきてあつ 園より

門號 ホ2 5635 巻

岩名藏本

やまとうたのみちはふるき人のふかきこゝろを歌よまむ
文のことは多かるは神の御代なる
ゆゑあるをとるとてさまざま代々の
はつきのこゝろもしらでかゝはまもの
のこゝろえし義は詞のえらびてをには
このさだめるとすなはちことわりつまびらか
すなはちまてしるしをかゝへにしてへこそ
なほまたはあるは作河なる周防乃

国へひの庵あるじ何某の方にかゝる
ことふみてことば言をとゞめおかしかゝる
ことひ萩原ぬし吉備人にまうけ
てなりしことのなかにたてむとすゆゑのれし
うちたしき中らひとなりて親しみふかき
しきをかのことのすぢらをむねこそ
なくされはいそ探しきを作るをいんそれ
この係をなんへいてむとす草とまて世のてあ

を物きこむまでさはがしきわざなれば
さやうのいらへとて種々のことども
かいつきてこの書しるされたるをみるに
旅にありすときくれど家おほかたところせき
なほさるとおもふのことば学ぶなるわざし
たとふるき風雅に思ひこえざらむ事をしの
まちなりとやいひそめしさるべきもてゆく
まうおほくの人学びとしうたびのる

ほんあまたもいひふるしてまことに教へにかなた
ちまき物ともまたわかさなれば旅のよそほひえ
ばかりのおのづからこの道にいれる人ぞなれ
かゝる編にてたゞおのがまことのみむなかれ
弘化三年二月十日西田直養しるす

弖尓乎波係辭辨

萩原廣道 述

係辭とハ。先師本居翁の考へ着されたる詞瓊綸。またてにをは紐鏡此図などにも。上より係る辭ありて。てにをはを三條に分ちて。右行は。も。徒。中行ぞ。の。や。何。左行こそ。と挙られたる類を。今かかりにつく名付るなり。かゝるハ係辭とはさざる文字ハ。漢籍ともよにはありやなしや大かたさるまじきなれども。これらの辭どもを概めく何といふべきやうもおぼえねバ。まづかゝりとはいふ名までをまうけ出づるのなり。辨とハ。右の係辭どものおもむきは。なほいひそやおぼゆるふしもあれバ。暫く改めて。

右をバすべて徒とし。中をばぞやかとしてのと何と紋除さるよしぞ。
こ記まへいふなり。左のこそハ。皆ちしかしバ論なし。さらに彼本居
翁ハ何事ふをもめでまく深く達らまそ。世ふ比類なき博士ふなんあり
されバ。こちら几年を經てみざまし来りしてふをはの本末よ。きちしるな
る係結乃いろことをど。ちぢめて委く考へ出して。此瓊綸といふ書を
作らまきさるむこうり此人なまさバ。誰ゥハ其教説を受仰がざるぞた後ま
どもよるやまかく誤なしともすべからだ。此る條どもいうバ必悍なく
論じ改むべし。そまさそれハち彼翁の心なるよし。玉勝間二の卷ふ
於んごろよいひおかれたり。其詞よ云。吾よちるがひく於まなげむこも
がうも。己が後ふ又よき考かむかへのいできたらむよハ。かならず己が説ふ

なづみそ。己がよしきゆゑをいひて。よき考へをひろめよ。すべておの
が人をしふるハ。道をあきらかにせむとなれバ。かにもかくにも道をあき
らかにせむぞ。吾を用ふるにハ有ける。道を思はで。いたづらにおのれをたふ
とまんハ。己が心にあらざるぞかし。とあり。此段の上に。師の説になづまざる事。といふ条ありて。それにも委くいはれたること
あれど長けれバこゝにハ略く。其書を見るべし。これなんやがて彼翁の。世に傑れてきこえし所は
あるなる。廣道いまだけなきほどよりさるをもて。まづ一條をだにわきまへいまだ
あいともくおよばなく。悍なることハあれど。いささか思ひ得たりしを
あるふしもあれバ。彼玉勝間にいはれたる教説に従ひて。かつがつ論じ
試んとす。されどすこしも僻説をまじへぬべけれバ。見ん人思ひよら
まじきことともいはれバ。なほすこし悍れく辨まへ改めてれよかし。それ

ちかき世のまなび心ふかくかの教説ハおもふにあまりバなり。さて先彼三轉の右行を徒として挙られたる中より。其もの二つを別にぬき出されたるハ。徒の中にても。は殊に多くて著き辭なればなるべし。然ハあれども。其餘てにをはのぞなどやよりまでへなども。すこぶるおほく應きて結ぶ処へかゝはらバこもはかりをとり出べきにハあらざるがめしけれバ今も右行をバおしなべて徒としたり。そのうへ徒とハ。ぞのや何こそ此外なる辭どもを名くるよし。環論にいはれて。なべて平語なるを切ると續くとの差によりてかく。彼ぞのや何こそ等に對へ見る時にのみ。其格なるがごとく定めて併して紛はしきぬしもなければ強てハ其格なくともありぬべし。されどなほそもの外。てにをはのぞなどで有れ結びなども。

右行の格なることとハ。今はじめていひ出ることなれバ。疑しくおもふ人もあるべきなれバ。證歌どもをかきいだしつ。ひき出ぬ。こゝにあげたる係にも准へてしるべし。

古今　おちたぎつ瀧のみなかみ年つもり老にけらしなくろきすぢなし

同　立田川もみぢみだれ[て]流るめりわたらバにしき中やたえなん

同　かきくらす心のやみ[に]まどひにき夢うつゝとは世人さだめよ

詞花　ふるさとハ春めきにけりみよし野のみかきが原[を]かすみこめたり

古今　秋の野に人まつむし[の]声すなり我かとゆきていざとぶらはん

同　かへる山ありとハきけど春がすみ立わかれなバ[バ]こひしかるべし

後撰　うきことをしのぶるあめのしたにしてわがぬれぎぬハほせ[ど]かわかず

拾遺　ゆきやら[で]山路くらしつ』ほとゝぎす今一こゑのきかまほしさに

後撰　あすか川いかなる坊[より]かへりきん』みなきてこそもいやしかりし紙

万葉　大宮のうち[まで]きこゆ』あびきすとあごとゝのふるあまのよび声

堀川百首　細引せることほの湊べにさわがれてあげさくば於[へ]まちづゆるなり

はじめは落ちざる云々の哥のごときハ。ことさらに徒なり。其余(ホカ)にて

[□]の中なるてにをはより。係(カヽ)りあるにかゝれバ。いづれも其辞の結(ムス)びなり。さればそのもの外。右は辞どもにして。徒の屬(タグヒ)は係辞なることを知るべし。

○次に中行れの[□]ハ。かとより平語(タヾコト)にててにをはにて。係辞にはならず。[□]やとか[□]とは反激(ウラガヘ)なく閑(キツ)するを。同じ類(タグヒ)の辞なるを。瓊(タマノ)綸(ヲ)にも紐鏡(ヒモカヾミ)にも。[□]やをばこむ[□]と挙(アゲ)てかをばやに屬(ツキ)るごとくせられたるは。[□]何等の類

を係辞と見られたる誤より。まどひ出来たるものとおもはるなり。これらのことハ。てにをは畧図義解といふ書(フミ)に。委(クハシ)く辨(ワキ)まへおきつれど。なほくにハ省(ハブ)きて。唯(タヾ)其[□]の[□]と何とは係辞にならざるよしをいはん。[□]のそ

瓊綸(タマノヲ)三の巻に。[□]のは結びハ紐鏡中行の段くれ辞にて。[□]ぞや何なとく同じきなり。上に出せる三排説哥のめし。但しぞや何によくかなふきこそ。[□]のハやく軽きなるに。かの定まれる格にそむきて結ぶこともありとぞ云々

とあるを。紐鏡(ヒモカヾミ)にもぞや何の條(クダリ)に。ひとつに挙(アゲ)て。係辞とせられたり。

今案(イマオモフ)に。ことさら先(マヅ)ひがことなり。なぜなら此の[□]は結びと見られたるハ。いひさして意(コヽロ)を含(フク)め残(ノコ)したる畧語の格(かゝる類を畧語と名づけて。一つの格とするよしくはしく畧図義解にいへれバここに省く。)ごとく。全(マタ)く結び終(ヲハ)りたるものとハ見えねバ。おほよそ哥ハ句の限(カギリ)ありて。

のノ係辞ニカキリテ
残ミノ云ノミアリ
トセルハ誤ナリ
モミ此ハノ説ノ如ク
ナリ然タクノ中
ニハ詞義ノ上ニテ
トナメタルモテ
マタ数首アルヘキ
理ナルニヤ
またこの子ヲ此上中行
ぞやかこ属スル
のハ系モノ詞辞
ナルコトウナカルヘシ
ゐるも切のナリ

詞義の尽る処まではいひくだすともあるなれば半にていひさしておく其残れる意の関るやうによむことも常なれば殊外にも多きことなし。環綸に動かぬ云にて結ぶ格あり。変格などいはれる類皆なあり。然れば定まれる格にかゝはりて結ぶともなほあらずとやうに。いはれたるまで。其格にかゝはれるもありて。はなちたるはやゝに格とはいひくだし。かくいひくだるとも。なほ肯はぬ人もあれば是までぞかけ三転証哥をひき出く。其諸るゆゑをいふなし。

古 ひとりして物をおもへば秋の田のいなほのそよといふ人[の]なき [コトヨ]

後 吹風のそよと物とはしりながら散らす花[の]恋ひて惑ひし [コトカナ]

古 みよしのゝ山のしら雪ふみわけていりにし人[の]おとづれもせぬ [コトカナ]

同 うめの花見にこそきつれ鶯[の]ひとくひとくといとひしもをる [コトヨ]

千載 宮城野の萩やをしかのつまならん花咲しより声[の]いろなる [コトハ]

同 東のかたよりきそめ人やきたりけん淀のこゝろも[の]きは乱るゝ [コトハヨ]

後拾遺 かきとめてとふ人なきをあやめ草いかにしく駒[の]すさめざりける [コトヨ]

長安三年 田社寺合 おきつしほや川らんいさりする芦屋のさと[の]立さわぐめる [ハ]

後拾 あふ坂の関をや春はこえつらん音羽の山[の]けふはかすめる [コトヨ]

古 ちるとみてあるべきものを梅の花うたてにほひ[の]袖にとまれる [コトヨ]

金葉 よし川岸波はあはれ八十よあまりめぐる絵あかき宮川[の]よどごろかねる [コトヨ]

いせ物語 夜もたゞなきゐるにもあなかしこけ[の]すぶ紀にゆきてせるとやのうくる [ハヤ]

新古今 なぐさめん峯より出てたり外山のさとに声[の]おちくる [ハ]

後 いにしへのこゝろハなくやありけんきみしめしこと〔の〕絶てかへらぬ 〔 〕〔コトハ〕

好忠集 玉垣のみつ川乃湊乃まもりあまたバ行かふ人〔の〕ちぎりをとむる 〔 〕〔コトヨ〕

古 今しハとわびにし物をさゝがに〔の〕衣にかゝりわれをたのむる 〔 〕〔コトカナ〕

拾 みやこ出てよハにやきつる郭公いつかたかけて我〔の〕きこゆる 〔 〕〔ナリ〕

中務集 たつ川雁乃来鳴わたりつる声よりぞ佐保山〔の〕思ひやらるゝ 〔 〕〔ナリ〕

古 春たてど花とや見らん白雪のかゝれる枝にうぐひす〔の〕なく 〔 〕〔ナルハ〕

続拾遺 俊成 人しれぬおもひやかよてなきぬらんかりかし〔の〕おもひをふらむ 〔 〕〔ナルハ〕

千 夕ぎりや秋のあはれをこめたらん分いる袖に露〔の〕おきそふ 〔 〕〔ナルハ〕

古 霜のたて露のぬきこそよわからし山の錦〔の〕おれバかつちる 〔 〕〔ナリ〕

大和物語 山里にたれをとゞめくおまし語〔の〕露のよく深くなるらん 〔 〕〔コトヨ〕

万 浅茅生の百木の梅乃ちる花〔の〕あまとびあがり雪と降けん 〔 〕〔ヨ〕

新 たちかへるなきかはらてねのの見る夢〔の〕長きねむりをむすびかへなん 〔 〕〔コトハ〕

右の證哥ども。いづれも結辞(ムスビコトバ)の下に〔 〕印してきこしめす意ふくまりて聞ゆれバ。全(マタ)く結びはたらかず。●印をたすけるハ。のと結辞との間(アヒダ)にあるてにをはにてもしるよしは咲(サク)●印のてにをはより。結辞へはたらける語(コトバ)脉(スヂ)なり。されど暫(シバラ)くの〔 〕ようも係(カヽ)るごとく聞ゆるをぞ。その意をよく見まじへバ。かゝる〔 〕印の中よりこもれる意の含(フク)まりて聞ゆるなりよく味(アヂ)はふべし。すべて語脉(コトスヂ)ハ。近(チカ)きにつきより續(ツヾ)く理(コトワリ)なれども。上に重(オモ)き脉(スヂ)の辞(テニヲハ)あれバ。まづそれ方よりむすびて續くこと。瓊綸(ヌエソウ)にいちじるしくかくのごとく。〔 〕〔 〕〔 〕ぞやかこそとぞもの類(タグヒ)のてにをはを重(カサ)ぬる時ハ。〔 〕〔 〕〔 〕〔 〕ぞやかこその重(オモ)き方(カタ)

よそ結びきこひなきなり。のと其餘れてふをはとハ。大かた同じかとく
の重ちあれバ。決くのより係あるる脉とハ関あれバ。いくたびもよみ試みて。
さる意を知るべし。ちてあくきろぞふちるなど。いはゆる四段言の第三段
れ語なるし。らんきんなどの激さる辞なるとハ。其結びにて切まてつること
くゆも聞ゆれど。なほ印の中よちるしる処まで いとざれバ治定せ
ぬ意なり。さるハ此辞どもハ。續きと切まとをする詞あるゆゑに。かく混
ちし紀あまでど。のよ已係りたるハ。皆續く云れるなくま らんきんの類ハ。いづまれも切まてるくるぞ
とく咲やまどとも。古きみよゆくらん君がかりきん人など。ぞやかなどハいと重き辞ある
ちぞけても云まべ。切まても續きもする論なし。
故ふ。らんきんの類も。大かたハ意切まて聞ゆれども。それぶたゝ意の残
あるるごとれもなり。ましてのと自餘れてふをはと異なるとなられ

バ。意の盡ざることをあらはし。此切ると續くと相かゝる詞ハ。下に
何の處にいへるも同じ。准へてあるべし。されのも何も係辞ならざる
證據あり。ちくこの係辞めきて聞ゆるのハ。悉く俗語に譯すると
きがといふべきのなり。されども同じのごとく。どちまとかなへりならぬ
ハあしぞさてやる。

梅花まよりさにほ咲しかど見る人まちまてゆきのふりつく

かくれぞごとく。のと係あるまて流ると終ることハ。意をふくめて結よ
よし。瓊綸まもいそれ自バ論なし。三の巻ス。

古 山吹ハあやなくさきそ花見むとうゑし人のこよひあなくに

何ふまでのかちえもられハなふせん小見そもむのなくさみのあくた

此類を出して、てにをはにても留まらぬやうにいひ流したるは、皆さしかゝりたる句にて、上の句よりつゞけたるなり。然れば下は此にありしの類は、結び詞はあらじ。
なげかせしこれは歎息の辞なり。くはしくは略図義解にいへり。また

古　花の色は雪にまじりて見えずとも香をだににほへ人の知るべく

後拾　きのふまでよそに聞えしほとゝぎす宿ぞうれしやなくやと人のゆくへうし

此二首を出して、かくさはるもむすびがたしといひたれば、これも結びはなくてもよからんぞ。上の歌は四五の句を倒に置たるにて、倒のかたちなり。下の歌は人の向へと合せむとなふ。かゝるの辞をとりて語勢をはぶきたるすがた、何の係もなし。まて。

金　ちりかゝる花をきれむしく袖は袖のぬれてあるなり

同　今よりは秋の夜ながき月影のもくへもさぞな人さそひけり

新　むすぶ手にかげみだれゆく山の井のあかでも月のかたぶきにけり

千　玉づさになるべきのかきこころちしてあぐるよかりのなくなり

これらを挙て、いづれも定まれる格にもあらずとて、かくかくと論じたるは、よしあれどのをさして係辞とせざれば、あまりのもれさえ見えなく。さりながらなからしにのを係辞にならざる徒をみつけたるとしのへ。
ちなみの一首は、袖のぬれぬと点ありて、はてあらかりといひさらがめくもとあれど、なほぬれぬなりとはさきいるさしきえうをまた又さと結ぶのとく。

古　秋萩をしがらみふせてなく鹿のめには見えずて声のさやけさ

同　雁のくる峰の秋ぎりそれぞのを思ひつきせぬよそれならのうき

旧序　咲花に思ひつくみのあぢきなさ身にいたつきのいるもしらずて

続古 定家々　君をいのる心のまことさかくしてぞ治まれる世のためしをもつめ

この類を挙られたり。これらハもとよりさるべく留まれるがごとくなれども

よくおもへバなほさの末に意ふくまりて聞えたり。其含まりたる所ハ

よなどの意までとも聞ゆれど。はじく花に云くみ事のごとくなはばこそ結び

たるハさの下結詞。やがてそのゆゑに設けたるがわりたるなれバ。君をいのる云々の哥ハさの下にかくし

こゝろとといひ起してこゝろをうらされバ。いときこえやらにきこえたり。上二首は類も必あるのはやるさ世ノコトニアハレ之。世中のうさ

ヘコトニクルシクロムスベナシなどいふ意を含めたりと聞ゆ。されど去ろ歎息の意を含めて

こちむるハ。哥のはしになれバ。なほ結びの辞といひもしつべきなり。さりとてふかく

ふ。よや　やあり　歎息の　などの意を。ましうたぬくまりて聞ゆるなるべし。よろのは

係。さえるまじむめなど結ぶことハ異ざはなる例なれバ。さハ決めて結辞

にハあらじかし。すべてのハ。つねのに異なることなきまゝバ。はじく係

辞にハあらぬぞ。よし言らひ係辞ふたつあればあれ。皆紐鏡右行徒の部に

結びたり。ともかくなし。まくさ。

金　ちる雪ぞ真木の葉白く降にたるや小野山は冬のはびしき

好忠集　みぞれふり夜もすがらなる冬の夜はねざめをぬ格やまろが身のうさ

此二首を挙て。上にやとかゝりたまへバ。はじめの格とハ異ましくのかぎ結ぶ

もいさゝかかはれり。冬はさびしさまろが身のうさといひて一句を躰の語ろ

ごらくいひなしたる格にて。かのやといひて動かぬ云ふく結べる格と同

じと注せられたり。躰語のごとくといはれたるハ実にはるることなり。動か

ぬ言なく結ぶ格といはれしは。例のまどへり。これは末に[ナル]なるを[ナルベキ]などの意を餘しゝる。畧語の類なく。の八常のなり。咲外く侍ぐの格とて出されたるなまで。係辞とをざればおやしむづきことなるまじぞ。畧きていはれど。彼書を見てさるやうをばしるべし。

○瓊綸四の巻に云。だに など なぞ まれ まで いかに いく いかで いづこ いづら いつ いく。件の類。皆てにをはの結びの格同じきなるに。一つに合せて係の部とし。いも詞の頭に。係と挙ぐる是なり。さてその結びは。いづれも同じく中の行の段々の辞なく。一の巻に出せる三轉證哥のごとし。その證哥には。右の辞どもの内。いづれにまれひとつづゝを出せり。それに准へて。此外の内なる辞は。みな同格の結びと知べし。」とあり。今案ふにこれはさることの

ごとくあれども悉くひがことにて。一の巻なる三轉證哥の中に挙られたるは。かの結びなるといふはさして意をふくませたる。畧語の格なるとのことなるを。さるは。係等とかと重なる時そがあるをそが畧語の下になく例なれど。結びの脉は。下のかより受るとさとる。さしあたる理なれば然るをいかにしく考へ混ぞられまん悉く係等の結びとして。かの係辞をばやに属するごとく傍にせられまいぞるより。此件のことどもは。みなべくあひごとくにはなれるなり。やそてまるに。係等と結辞とのの間にかのりしなきことなるがそれ結辞にても。意義盡して治定せざる哥どもあり。はまたば決く係るの結びとは定むがでしかくても疑ちん人の為に。なを彼證哥を引出で。其証を示すなり。

拾　石見がた[何]かハつらき　つらからバ恨みがてらにきてもみよかし

後　浅茅生の小野の篠原しのぶれどあまりて[など]か人の恋しき

古　花よりも人こそあだになりにけれ[いづれ]をさきに恋んとか見し

同　[何]人かきてぬぎかけし　藤袴くる秋ごとに野べをにほはす

同　君をのみ思ひこしぢの白山ハ[いつ]かハ雪のきゆる時ある

同　世中ハ[なに]か常なる　飛鳥川きのふの淵ぞけふハ瀬になる

同　咲花ハちくさながらにあだなれど[誰]かハ春を恨みはてたる

拾　忘れ[illegible]も[など]か君がきかせる

後　深く思ひそめつといひし言の葉ハ[いつ]か秋風ふきてちりぬる

古　[誰]しかもとめて折りつる　春霞立かくすらん山の桜を

同　[誰が]里に夜がれをしてか郭公たゞこゝにしも寝たる声する

拾　[illegible]岩の花の色にもそめてける[いか]なる[illegible]よりはくる

後　秋霜ハ[いか]ならしてか[illegible]紅葉を[illegible]ハ錦[illegible]する

六帖　[illegible][いかに]の[illegible]

古　はちす葉のにごりにしまぬ心もて[なに]かハ露を玉とあざむく

同　難波がたうらむべきまもおもほえず[いづこ]をみつのあまとかはなる

同　花ちらす風のやどりハ[誰]かしる　われにをしへよゆきてうらみむ

同　東路のさやの中山なかなかに[なに]しか人をおもひそめけん

後　穂に出ぬ[いまハ]かせまし　花すゝき[illegible]秋かぜにすてやはてなん

右の哥ども。●印けるかゝりにより。強(ツヨ)く激(カヘ)りたる語脈係(コトスヂカヽ)りあるゆゑ

然れバ。何等の結びにかゝらんぞ。かれ結びあることよく味ひ分つべし。

古　瀧つ瀬の中にも淀ハありてふを[など]我恋の淵瀬ともなき[コトゾ]

新　八重ながら色もかはらぬ山吹の[など]九重にさかずなりにし[コトゾ]

旧　夜半ハなかりけるまでおもはざりき[など]我が夜にひとりねもせぬ[コトゾ]

古　ことならバ思はずとやハいひはてぬ[なぞ]よの中の玉だすきなる[コトゾ]

六帖　みくまのの浦の濱ゆふ[いく]かさね我をバ君がおもひへだつる[コトゾ]

新　[然れ]ぞこのころれひぞらもちらちするたんのすだれ我をまづぬる[ハ]

後拾　秋萩乃咲くよしも[など]花の[の]なく[コトゾ]やらむ夜ハねのがつまかも

拾衣　ひとりするになりなバさてもやむべき[など]二夜に思ひなやまん[コトゾ]

古　いくよしもあらじ我身を[なぞ]もかくあまの刈る藻に思ひみだるゝ[コトゾ]

旧　然ぞ秋よたかくぬるのゆゑに女郎花[なぞ]色よ出て何ぞよそはつろふ[ゾ]

右の哥ども。[　]印の中に片假字(カタカナ)して書しるる処までいひぞれバ意盡(ツキ)ずして治定せず。さればこれハ畧語の格なり。中にもいくよしもあらじと云への哥と。然ぞ秋よたかくぬるもかのゆゑに云への哥とハ。何等の辞重(カサ)なりされバ。係辞にあらざる證(アカシ)とはなし。但(タダ)しいくよしもの哥ハ。いくの下にとめしあまた。なぞじと右行の格に結(ムス)びたりなどいふ人もあらんか。この事ハなほ下に論ずべし。さらバかゝる下句になぞともと重(カサ)なりたる語。みざるところなるをバ。いかにとかせん。然ぞ秋よの哥ハ間(アダ)のぬにて結びたるをさならぬ續けたる格なれども。いかに續(ツヅ)きたる意にてひとしなれバ。何等の重(カサ)なりたることハ論なし。只よくまつるをよしと考(カ)へてよし

く。例等ハ係辞あらざることなし。かへりてくはしるべしきこえてあり。

古　なにはハちるれども梅も咲てなり今ハ春べを[なよ]ふまてとゐるらん

古　うれしさを[なに]ゝ包まん。から衣たもとゆたかにたてといはましを

同　をみなへし秋の野風にうちなびき心ひとつを[たれ]によすらん

同　なみだ川[なに]みなかみをたづぬらん。物思ふ時のわが身なりけり

後拾　こぬもうくくるもくるしきまつぢら[いか]なる方にものひきらんなん

拾　[いづ]くにか世をばかくさなん。世中に身のなきまゝバこそ人もつれなき

古　春日野のとぶひの野守出て見よいま[いく]かありて若なつみてん

古　春がすみ[なに]かくすらん。桜花ちる間をだにも見るべきものを

拾遺　山ざくらあくまでいろを[たれ]見てん。いくよの花のそこに匂へバ

かくれどもくぐんと激て結べし。哥ハいひ竟るがごとくなれどもなほさにハあらし。例よせまくんハ譬ふるに物なしといふ意味ぬし。例よつまんハ包むべき物なしといふ意を餘しゝるなり。些しうたに結びとハいひがたし。餘も准へてしるべし。さればやかの下のんとハ異にて。[コトゾ]などの意味まづよんの下にそへ試みても調ハよろしけれど意ハさるべくもあらず。あるなり。さまんハ切るのにあらずて續きたる辞なるなり。されば直に續（右行ハ切る辞。中行ハ續く辞なるをとゞんハ右中いづれにもよろしくて結ぶこと。委くはのちにいふべし。さて）きても聞ゆることを知べきなり。又末のらんまんなんてんなどへ係りゆく辞ハ。印つけたるてにをはどもより。語脉續きたるが其らんまん等ハ右行徒の部のらんまんにて中行ぞやかなどの類の結びにハなりがたし。右の證哥中にも春霞[なに]かくれ

らんとあるも。心のいろをたれ見てんとあるとハ決（ケツ）く何誰より係ある
るなれど。こゝにハて右行の結び中く。中行の結びならんてんにハあら
ずと知るべしとなり。

古　ミかの原わきてながるゝいづミ川　いつ見きとてか恋しかるらん

六帖　きのふたにくらよひぞろりを旅衣　いくよへぬとかそでのひづらん

古　あるゝ者の方もとろゝ郭ゟ何とろしと　あきて帰るらし　秋田のいねもかけるゝて何とうしと　人のうるらし　けふ見モ旧記之

右の哥ども。これ上ハ必（カナラズ）切（キル）る語（コトバ）よりて受（ウク）る例なれバ。何等を係辞とすれバ。上の哥ハいつ見しとあるべく。下の哥ハいくよへぬるとはるべきを。さはあらぬよしも。何等ふかくもあるとハいらざるをしるべし。此るを瓊綸（タマノヲ）にもぞのらんを結びとして上れてふをはのそのひれとの下まで及ぶ格。とて挙（アゲ）られたれど。上の語（コトバ）との下まで及（オヨ）ぶといふハあたらざることをよく。

らんハかれ結びなることを著（シル）しきものをとや。此一つをハ挙られたる哥の中にハかゝり（あまたもあれど。ぞまでハ皆右行後の結びぞ。）けるなり。瓊綸（タマノヲ）四の巻に出されたるぞ。さぞくれ何等の中にとまれるかゞく、いそまほしき事どもなり。さて先（マヅ）何等の下にかゝりをとなくことの論ぞ。いとくいはまほしけれどなく。実（マコト）に彼説のごとく。中にもかもじこれなど咎よろしからぬなど。いはまほしきハ。此翁なる人のいひ出べきこともおぼえねど。いとあそではあらし。其末（スヱ）に。などや。なぞや。いふぞや。いづぞやなるなれや。いかなれや。なるらん。やいかに。やなにぞなどの類を。別（コト）に一つの格とやうにいはれたるハ。ばさなる心ならんといふにハ。惣（スベ）て何を係辞と見えらまほしきなるに。それに重（カサ）ねて。やとはいへどもさやうに。思ひたまはられたる誤（アヤマリ）と見えたりよりかく何等とやかと重（カサ）ぬるなくもなく。何等ハ係辞よりなるまじ

をしるべきなり。おほくがをたてゝやをおかぬハ唯語調(タヾコトバノシラベ)のあしきまゝバ此故か。まゝハやよりもかハすこし平(ナダ)らかに聞ゆる方にてもあるべし。次に。動かぬ云ふ如く結ぶ格。いひかけて結ぶ格とて挙(アゲ)られたるハ皆略(ナ)語の格なり。このすハ略図義解略語の条に詳なり。次に。切るゝ何。何を重ぬる格。などいへるハ。いにしへなぞとやうに問(ヒ)かけたる辞におのづから切れてあると。さておのづから重なりてあるとよく。皆平語(ナタヾコト)なり。これも委くハ略図義解にいふ。次に。こそと受(ウク)る格ハ結びにかゝるものなれど。とて挙(アゲ)られたる哥。

古　ぬきつゝぞあひてをわたる年の内に去ハいくかもあらじと思へバ

同　いくよしもあらじわが身をなぞもかくあまのかるもに思ひみだるゝ

後拾　なにがよもなにがよもなからぬ世中にまつなどいふかにならんとすらん

此類あり。又こそと受る意よくとゝのはぬ格とて。△印の処にこそとあるべきといへり。

古　いまいくかまでしなからましバ常もこそのハながめてわれ世ふらまし

後　わくら山のまつ本なきにてものどかなるハいつゆくべしと見えなましかも

此類を出されたり。その説冨士谷(フジタニ)氏のかざし抄にも出さく侍ることのよくなるまでも。こそよかゝるもの故にハいふぞ。右のうちいくよしも云くの哥ハ。上に既に論じたるがごとし。誰がよしも云くの哥も下の句にいひてとあれバ其でもあり。わくら山の哥の哥ハ以河ハ哥ハ切れて切まつるもの。とく交る語脈にかゝるを辨くべし。きたるハこそをかじなかくへ結びにかゝるあらぬもなきバなり。其ハ哥ども。

古　こひしきバおもかげ名ハたちぬ世中ハはかなきものといひながらも

金　長浜のまさごの数もなにならずつきせぬ君が御代のかれ

於　夏をまついつでかかるよみてしぐれありてめくるよれすぐはかなふせん

古　[こそ]秋ならぬ身のゆゑをこそなげくなれなぞ名に出てまつはすらむ

拾遺 恵慶　山ざくら心のいろを見れなんてん[こそ]よそ花のそこにありけれ

かかりて皆をかしくなられど。結びにかくちかふぞ。なにか此外にもおほし。このうち[こそ]秋よの字よりて八上よりて山ざくら

の字も末句よりこそかへりて三句の催へかへりゆきたれバ同じ趣なり。こまかく読む格ハなくぞこ係る八係辞

にかからざることは知もあきらかなるべし。次に一つの例とて。

古　みちのくのしのぶもぢずり[たれ]ゆゑにみだれそめにし我ならなくに

旧　津の国の[なには]ハおもはず山しろのとはにあひ見んことをのみこそ

五十七　梅花[いつ]ハをらじといとはねどさきの限りハをしきものなり

こまかる此類を出して。此格も結びにかからぬよしを注せられたり。

然までも。おなじく例を係辞とせざれバ。なほそのことをなほしぞれらん

しら結びにかかることなし一つの格などいふもの。いくらもありてハ。いかぐくら云ふたつる格といふべき。右の中にも風の山みてふ字ハ。助もハだにて知まへるれバ右行の結びなり。樹木の字ハ。ぞとらんと知まへるをよく受て続けたるなり。さるを末までつづきたる字どもとおなしころにて挙られたるハ。委しからざるに似たり。此餘くさぐさの例を挙られたれども。

平語と見れバ疑もしさふしもなかれバ。すべて論をもいくといふ詞の用ひざまを論ぜまてくるハ。必ず結ぶことく関わる所。ことにはおのずから八の有と無との故あるやうにいはまでたるハ。心得がたし。ぞなどもり中八のらばと云ても。のにくもそれても。上を受てふをはを隔まバ。ぞくれ義ハ悉く転アりて。どといひてるふひとしくなれバ。こそといくれ代といちふぞいくだくの年をふぞいく年をふるなどいふ類のごとし。こそのえてにをはの下までハ及バぬなり。さるハ三の巻に。

後　みし國いくそのよゝ年をへてたふのこゝろを待てみつらん

拾　あさましや木れ下陰のいはし水いくそれ人のかげを見つらん

新　うき人の月ハなにぞのゆかりぞと思ひながらもうちながめつゝ

この類を挙て注せらるゝまゝなるやう。いくそのそハ十許とも見ゆれど。古今集物名にいくそばくともよみ又右の哥にそれとよめるをも見れバ。十まりはらで添る辞許とおぼしきなどにて出せり。かし然らバいくそたびなどいふそも同じくて。十よりハあらざるべし。かし又皆十の意ならバ。新古今のなにそれとよめるハ。例なきひがことにやあらん。けふあがくさくらん」といはれたり。今案ふに。十の意なるべし。さて十の意ならバ。まで例れ数おほかるにいへるにて。五十八十百千

などの類れバとりしざるハ右の数に出されたる後撰中にいくそのをかり。まさにいくそたびおける萩の上葉露など。露煙よいへるもあれど。そまこもあほおわきるにいへるまでなり。いくそ月日をかぞふべきあらんとあるを。正しく十の意と見えたり。新古今なる人ハ瓊綸に注せられたることもなきまで。なほとひかくるぞまさく意せざくなり。いくそばくといふも。いくそばくといふ詞に。十を添へたるまでなり。

かざし抄の俚言譯にいくそよイカホド。いくそばくよ何千何百ホドとたゞよくあるをまり。いくそばくのそばくハそくりとひふその辞ときこえたり。

○瓊綸二の巻に。變格といふ名目を挙て出されたる哥あまた。皆右よいへるがひけしく残る意をふくめたる略語の格と。何等の下をはぶく乃ごとく結びたるとのことなく。別に変ある格なるにハなかるぞ。上にもかつ

いへるごとく。格といふことをきくハやゝたしかにていはゞ。変格といふことハ
あるまじく。それまさしく実になるべくなりしバ。自餘をも決く格とハいひが
たかるべし。あまつさへ皆かの何等を係辞とみてまてるよりの誤
なり。其哥どもかさりしぬきいでて。それ然るよしをいはん。

後　ふる雪のみのしろごろもうちきつゝ春きにけりと驚かれぬる　コトヨ

於　かしまなるはしく方の非れたぐくと見ぬ身ひとつに衣をつゝつる　コトヨ

古　おもひあひくねおもふ心の見ぬ袖に屋どる月さへぬるゝがほなる　コトヨ

後　春ハ花秋ハ月にとちだりつゝ行に心見られとおもはざりける　ハヤ

後　ひぐらしの山路をくらみさよふけてこの末ごとに紅葉てらせる　カナ

詞　あふことやなきこゝろのをとなふらん此バ後まさバ深ててらせるく　ナリ

新　梅花香をのこす袖にとゞめおきて見ぬ人ハ何とつまもせぬ　コソ

源氏蓬生の巻　いかで山ふみにをバかにおぼしてをぐるの様にぬらしおもひける
さまでの事。いづれも終ハの句に歎息の意あるべく。□の中に注せられ
ごとき意を含まれバ。畧語なり。環輪にと甚しくとらちをバいはれたく。
末のいかせ山我事にたどたる羽によとうもるも云ことありて。ぬく
まどひたるよといふ言葉なり是ゆく なぞらへあるべしとはいはれたり。然
まとも此格ハ右の外にも。動かぬ言の結ぶ格。いひかきよく結ぶ格。
とて挙られたる哥。まるで心をえぬものなどなそこそなどので心をはふて
いひすてたる下に意の含まれて聞ゆるなども。皆同じ例なく。略
語の格なるまじバなられざりしをゆかりまさて変格とハいひがたかるべきを

いとくむつかしきことのやうにいひくゞみだりにはよむまじきよしいまし
められしはさることなれど。あまりに過てわりともいふべし。さてまた。

後　恋しさも忍びこめたるあはれ人にちらくあくらさ〔なむ〕なり

旧　なよ竹川ながれは絶ずありもあるおもひぞさらにつだうりの瀬ゆや〔なむ〕なり

六帖　よその人のいとくそのをとがむ也なりといそぬハ〔[illegible]〕がらたなり

源氏わかな下　おきてゆく空も志られぬあけぐれに〔いづく〕のつゆのかゝるそでなり

後　君こふるなみだにぬるゝわが袖と秋のもみぢと〔いづれ〕まされり

新千載実方　うの花のかきねがくれのほとゝぎすわが忍びねと〔いづれ〕ほどなぬ

五社百首俊成　おちたぎつ瀧のうらみの岩ねこそけさぞ秋の上に〔いづれ〕はやくし

金　芦のよれ月やつやどのさむさびにし山石めぐる清水〔いく〕むすびし

旧　淡路しまかよふ千鳥のなく声に〔いく〕よねざめぬ須磨の関守

九首集　はなだちちりて萩の下葉も色づきぬおくまで秋は〔いづく〕まで来ぬ

この類をいと多く出して。何等の下なれバ。なるけるぬるつるをさきと
やうに結ぶべき也。なりけりぬつきしと結びたるハ変格なりといそ
まゐれど。さるまゝに何等ハ係辞にあらざれバ。なりけりといふが正格ふ
く。なるまゝるといふハ耳なれたるごとくなれど。それまたなんなく変格
にはあらざる。めしちがひて変格といふことはいつぞ。

古　こよひこむ人にはあはじたなばたの久しきほどにまちも〔こそ〕すれ

新　玉の緒よたえなばたえねながらへバ忍ぶることのよわりも〔ぞ〕する

古　うちはきてうしとや花のいろを見むおくなるゝそむるだうりを

千　山たかみ出にし月のはゝかりもちるとハ天の羽衣なりけるとぞ見えし。

此類上二首ハせんせんと結ぶべき意なるを。とてもぞと流さるゝ事になるとぞ。とぢめ下二首ハ切る語より受る例なれバ。流ぬなれぬといふべきを。流るなりけると續く語より受る事どもひとつ變格とハいふべからぬ。依てなれバ。それも皆かなありていふなれバ。此事ともの格をまなぶべき事どもハ略図ニ解ニ委くいへり。なほ變格とハいふまじきにや。さてつひでにいふことなり。瓊綸二の巻までにあるは不調哥とて。五十首ばかり挙られたる中に。八代集より後の哥どもハ。まことに不調と見ゆるもおほく。中にも玉葉風雅の二集なるハせんかたなげなるもあまたあり。されどもなほかゝるハひがむきにと定めがたく。右にいへる何ぞとの結係辞とせしが。門略語寫誤などのゆゑとうたがくみえまじバ。いとよく聞えたるもあり。そのかぎりをとりてよ出して。論じ試むべし。あれたるとおぼしけなどをこぎさまと。かつハ見べきぶるき哥のうち棄らるまじければ。かたくしきまゝバなり。

古　あらざりし家の雲ゐやまふし ありとハきけどみえるよしもなく

上にぞのや何ぞ乃てにをはなくしてきと留まるあり。八代集の中にはは此一首のみなり。と注せられたり。今案にこれハ略語にて。ホニ「コトカナ」などいへる。歎息の意を含めたるなり。ぞなたと結べバしもあれどさてら歎息のよふかく聞えざれバ。どなたといへるにて。のなたといへるに全く同じ。

これまでもかさの此係辞あらざるを挙しつる也。

新勅撰　ねごとよりすればみをとゞめおきて後の世をたのむやたのまもなた

さりまでも末に「コトカナ」とある意なり。ぞでなたといへるに異ならぬをしるべし

玉葉 いろにせんと見にもやくると山げてよろこく花もちりもてぬなた

この哥は。べきの下にをりしありて。さて初句へ立かへる意なり。末のをも省きて上へかゝる八例なまでべきとやうの辭は下に省きましるなり。きてくゝしたなり。ばれど格のうちとしるべし。

拾 かきほしくるゝころつみえある語なれど見てもちのだん人やはるとよくこまし八初句の下に「ナリ」といふ意をふくめてる意なり。されまでなかば出ていひさしてる本に。まて後見えあるといふ句へ續きてるごとく聞ゆるが難なり。瓊綸注にかきほくるゝとすべくいたれてるは。ほることなかるら。なほ格にそづまてるまにはいてしるべし。此次に出されたる新古今の「人よりもんのくたりながめつる月は誰ともこころし抄古本」とある八。ながらえん

てきとせられてるとも。うちなくまれまでり。

源氏 末摘花 かゝる衣君がこゝろのはらまきバきたかうハかくぞそだちつくのく

此哥ハ末に「アル」といふ意をふくめてる意。されうに聞えざれバ難なし。

躬恒集 このまより風にまがひてふる雪も。ましくといへバ花ろしと我も見ん

拾遺 兼好 紅葉の花散してさおきてゆくちもちかた人の紐ろとぞ見ゆ

上の哥ハ。見ゆるとあり誤写し誤りてるなるべし。いろにといふもの辭よりうけく自のうへにはなれて見なしてる意なり。但しハをともあるべき処あればいさらに労よろしく。下の哥ハ。上にさる辭なれまでバ。他のうへにはなれて見なしする意なく。我のづからに見ゆる意なり。ばれバ誤なること著しく。らべて見んまいめに。ばれをも挙げらるるなり。

続古今　いろかはる萩にそてあるせとてやつ人のこゝろにあるを秋風ぞふく

此ノ哥いろかはるにといひてぞ。切る詞なく。ぞといへるハかれもこれも秋風のと

あるをふくてよろし。と注せられたり。ぞふものといひてなほ調（シラベ）かなひ

て聞ゆれど。何を係辞ときこゆれバ。格のうちなるを。

新続古今　彩端ある本ぶのいろかおてつまで秋やとふ山の風ぞ。弟ふしをバ。

瓊綸（タマノヲ）注に。こゝまでハ秋やとたといふことを。外山（トヤマ）へいひうきせるなとまゝバ。

ぞもいふくひがことて八聞えざれども。其やよ重（カサネ）あれるハ宜（ヨロ）しからず。風

の弟よしむとぞあるまかし「た」とて何を今案（イマオモフ）にこれハ本のまゝなる

べし。のを係辞とせざれバ。ちむまで結びよハなりとて例のごとくへ末に

「コトヨ」などの意を含（フク）ミたりとしてハ。ちそられどこあるどよりかなあひ

○ゆ結し。

於　こゝまでこそや見ぬ人にふるやまひとされあふひあぐてハやむくまそうな

きのやハ決（キハ）めてもの写誤なるべし誰（タレ）とてもやとハいふまじき処なり

於　志る波乃うちちまりてこよひさへいそでうひとゆぬるとりやきみ

此哥此やハ歎息（ナゲキ）のやなり。かぬると結びたるを。とく受て。比てかく移（ウツ）ひて

切まてゐる辞にそへたく。語勢（コトノイキホヒ）を助（タス）けたるのこなれバ。ひがことふハなるらじ。

何とくやあるとうやなどいふまじひ例なり。されど右の言ハよきさことハあるべくぞなくし。

後於　こゝまでやまの月見るきびよ思ひやるちぞ十て山のぬりとあるを

伊勢物語　こゝまでやまの日これよあふみを此がれつゝ年月ふるまでよろきりが得なき

上の哥ハそゝのひがことそまさバ。ぞりハぞるの写誤なるべし。此誤ハ作るよお

あれみゆる人概に叶ひなると云めぬ人の誤とい
うべし

此一首の注きこえかるべし

ほれたしとなり。次の歌ハ舊本のまゝならバ。なたの下に[人ナル]といふ言
をおしてる意なり。されど藤井氏の新釋にハ。朱雀院塗籠本といふ
校了て。なるとしなりて。かくくハ論なし。にるをとかの新釈にハ。あるれ
下に人をといふ言をいひさしたりと釈るハ。なにかくにひがことなりさて
ちゝやの結び給ハしくなりとく。格にまがへり。かしいひさしたる意と見ん
るとても[ベキ]をふくめたりとこそやくなさまま。
貫之集 まちさこの峯れ松とやよの中をまかる人とやられハなりなん
ロ まちわとやいひやはらまし『白雲のとふこともなく岩にみるらん
おの格ハ二つれやかしをひとつにすべて結辞へかゝまてる也。萬葉集乃
長歌などにハ。例あることなり。にまで上の句ハ二つれやの間遠きゆ

あるまきてようしにまだしハし。次なるハ近さ故に。ひがことくハさる
ちたなり。次ある結句。みるらんとあるハきこえぬに
いせ集 ふる人ハまだきこそめとやうくひすの花よりさきにまなきとをぐらん
なり。瓊綸にんとうとある
せざれバ。右行徒の結び
なりや。ハとよの下にられば必かならでもありぬべし。
後拾 まてといひし秋もならバに嵐ぬるをまちかねさし露ハいかにぞ
このかなましにひがことあり。されども。とめより。かく聞えぬ事をよ
こ出べきをいはねバ。なほての誤とすべくやあるらむ。時世の上がれるにゆるて。

ほだしとなり。次の歌ハ旧本のまゝならバ。なだの下に「人ナル」といふ言をおとしたる本あり。されど藤井氏の新釈にハ。朱雀院塗籠本といふ本に依て。なるとしるせり。かくてハ論なし。然るをもてさるかの新釈にハ。あげたる此下に。人かといふるをいひさしたりと釈るハ。なかなかにひがごとなりけり。さてもやの結び紛ハしくなりて。格にまがへり。かしこいひさしたる言と見んるとても「ベキ」をふくめたりとこそ見るべきなれ。

貫之集 きくさごの峯の松とや世の中をまかる人とやみられハなからん

同 きちよとやいひやられまし「白雲のとぶともなく岩にみるらん

おの格ハ二つれやかをひとつにまとめて。結辞へかゝりたるにて。萬葉集の長歌などにハ。例あることなり。此まで上の言ハ。二つのれやの間遠きやあれまきてよらしばまだらハし。次なるハ近き故に。ひがごとゝハさらに聞えず。そのひとつ也。此まバいづれも格のうちなり。次なる結句。みるらん とあるハきくよろしば。みぬらんの誤なるべし。

いせ集 ふる人ハまじさりあとや。うぐひすの花よりさきになきそはじめらん

これあハ切れたるを。とく受けれバ。ひがごとなり。瓊綸にんとうとある是しと注せられたり。但しんも誰を係辞とせざれバ。右行徒の結びなりや。やハとよりて下にかけれど。必かならずでもありぬべし。

後拾 まてといひし秋もならバになめるをきゝのかなさし霧ハいらふにぞ

このかたやうにひがごとあり。されどもちぢめようあり。かく聞えぬ事をよく出べきをとりらねバ。なほての誤とすべくやあらむ。時世の上がるにゆゑて。

続拾遺 おもかげをいふにわすれぬ心こそはかなしとおもふもなほもかなしかりけり

此哥いかにを係辞とせざれば。其うたの誤とはなけれど。いかさまにもきこえは聞えぬ哥あまたあれば。論に及ばず。瓊綸に従ふべし。此外にも。変格に同じくて不調哥とて。

古 恋しなむ方もかくこそはかりときけまでまされどもあたらこゝちせる

後 まどろまぬ狩かうくてあかすかたうつゝもあかぬこゝちのみせる

新 わかれてはきのふきこそてへだててつまちかうもへまるきこちみせる

新拾遺 こぬ人をまつ秋風のねざめにはわれさへいかやなまびこゝちせる

新 夕なだにとるてるまたる沼間よりみゆる小篠のくさに消ぬる

日 いづくにもふかみちなかぬ法やあると空ふく風に問へどこたへぬ

此類を挙て変格の例なれども。いやしきをまきそへてそののちぞ。と注せられたり。ぞにもこぬ人をまつ秋風のといふ哥より上四首は。末に結ぶさる歎息の意あるのみにて。決くなりとも聞えぞ。但しぞまでもこゝちするとよみきりにるのみなるはならざるゆゑもなるにや。考へて定むべし。中にも古今集の恋しなむ云々の哥は。何のこともはとなりがたければ。論なくひがことなるべし。然までも。ゆふなだによそなるなる云々の哥より下（此外にあまた四首を出されたり。）此。例のコトヨハヤなどのこゝろきこえたる聞えぬまにば。然とのもじとは定めがたし。

○ぞとこそとは同じ類の辞なるを。ぞはこそに對へては。語勢やゝ軽き故に中行に結び。こそはいと重きゆゑに左行に結ぶだけの差と学ぶべきなり。ぞといひこそといふ意は。ぞは其字のところにてきかくは其なり。

といふ意に指示しるべきしかなる辞あれバ決めて動くまじきを
やうの處におきて語勢の抑揚をゆるしむるてにをはなり。いまハ
やがて清ていひならはしく。日本紀古事記萬葉集。其餘の古書
どもにいづれも清音の字を用ひたり。けれども中昔よりこのかた。濁り
て唱ふるやうになりしハ清てハなほ語勢の軽きがゆゑにおのづから
濁り来たるなるべし。さてこは此字其字の意の辞を二つ合せたるに
て。此ハ即て其なりといふに指示しきる意なれバぞよりハやや重
くきこゆる辞なり。抑揚も十きハ強くきこゆるなり。又これを願
ひの意に用ふるハ。此に其をひきよせて。近く我物にせんとの意なれ
バなり。萬葉集に與其をよめるハ。其を與へよと乞ふ意なるに

てあるべし。さてこれらの事ハ委く略圖義解にいひおきつれバ。ぞこそなどのかかるてにをはどもを。かしこけれど五十音図の位置にかけて。其のくらゐより詳に論じたれど此書ハ玉の緒にゆづりて。係辞のことをのみ弁ふるなれバ。いはん。いささかも引出さるハ。ぞ。こそ。等類あるよしをいはんとてなり。今ハたゞおほそかの瓊綸に出されたる説のどもなれ
中にいささかいかがはしき係もあるから。かつがつ論じ試んとすれども委く
用ひざまのことなどハ。瓊綸に委くいはれたれバかさねていはんも何かとう
いさむ。本書によりてきくらんをば明らむべし。さて先ぞの結びをあ
きらかにせん。歌の下へつけたる哥をあぐ。

後　あひみてハなぐさむやと【ぞ】おもひしをなごりしもこそ恋しかりけれ

堀川百首　ちりまがふもみぢのなか【ぞ】さだかなりところひとはりぬけふの松原

後撰　おなじく【ぞ】思ひつらんと思へども君があふことはまれぞとぞかる

此三首をと挙て。いづれも聞よろしからぬまゝぞと注し。このうち中の歌ハこそとむすびてもどく矣

さるあれバ。次の字の首とぞの字れ數あり。末の字ハらんと結びたるを。どくとくなるあれバ常の格にそむけるを一首ハ又挙られたるハいかゞあり。次にぞの結び辞を略

かしく下へ続きたる哥とて。

玉葉 小式部 雪ふるとぞよそには見つれども心に思ひありてハ似たる色もなかりけるを

同 能清々 ちる末もさぞなあらしのふくらん身のうきてなきぬなりぞ相(?)となれども

千五百番 哥合 ゑんづらしきまでもあすとぞ雪あれバくまもなき年をとなふるとぞさん

こまらんと出して。此格も聞よろしからねバとはれさわ。まことにさるとなぐる格にちかづきてまたあらぬもあらだ。文章にハ殊に此格多かれども。はじく耳にさからざるハ文章ハ係結の間や遠ければ平らかに聞ゆるなるべし。はたくえりもちたるよ時ハ大かた左にその結びに轉して

續くる例なく。右のたぐひハ見えてハ云この歌れごとく。格に結びて續け

たるハまれなれし。さまで格にちかづきたるをまたぞ。またこそその下ハ常のごとくに結びても

続けたるとぞその結びに轉して續くるも多し。物語日記の類を見て。さるかたをばしるべし。さて

また切るぞとて。

占 いでこれを人なとがめそ大峰のゆきふれはやさにあゆむところぞ

後 此の類を挙られたる中に。

君ぐらゐいちふところ此係るまハひし見れ法世の論なりしくと。ぞ

といふ哥をも出されたるハいかであわ。此哥のごとく。とぞと留めたるハ。末に

おもふなどの言を残したる略語の格なく。上のとハ別なわ。其外ハ環論

ふいはれたるがかくなるまでバ。さてはいはるまで。こそも格にすべたるぞに同じ係な

ましバより猶ぞ進べくおもふべし。其中にしかと結ぶ格ハ。なぞ過去のしに
激辞のかくれ（やかの二ツをかりに激辞と名くるハ。激反ある辞なれバ其によりていへるなり。ぞこそと同じくよれバ）を添て。さてより係ある
る重き語勢をこめて。かけ合しむるだくりの意ともしるまでなり。玉の緒ニハか
ハ疑ひのかにあらん。雖く中といへれどさきまでぞこれハまた同じく結くべき処なれバ。
必激辞あるべし。但し云ハいかにもかくして。かしのかの此びはべきれバ略きて結べるもある
ぞ。なほしかと結べるも。なほしふかれ比添るやすてふく。皆語調によれるなり
なるべし。志と結ぶ格とあるも。出でられ比省かりするやすてゆく云ハ同じ
らしと結べるも同じ
まこと其志よりもてくらして。續くるも例ふく上にいへるがごとし。
まことその下にハ右行の切る辞に結びて。ともと受て續くるもたりぞ。
金　あはれしやいかにかくこそあるかしれ子さこそハおほのすがひなりとも。
十　こひしなばこれをたにおもひ出よさこそハはかなきさきかりなりとも

新　山ふかくさこそこゝろハかよふともすまであはれをしらんものかは
この類なり。玉の緒に例なきと心得て此ある（さこそこそてあざれさる事ども也）。さてこそと結ぶ格とて挙られたるハ。
（をハめのをとつまこのを　ありと注せられたり。）其の處結びにハたらくぞ。されども紛らはしき例なきハ。
恐らくハ千載集より後の哥にて。ひがことゝもあらんか。其ハ云ども。
千　よそ人にこそしられぬるかな君にこそかんせバやとなりに雑の志づくを
続古今　あらたにこそ人の心もうつろふを名にかんせたる山ぶくろ　これ
五社百首 俊成　ゆめにこそみやこのともみるべきを袖に波こそちらし出しかば
こそまてあり。上の哥ハもとより立ちかへりくちぐちに係る云なれバ。決く結び
にハあらじ。こその結びハかんせぞの下に略たるを。やまかへくかくてとく受
てはつけるなり。されどもそやと續きてる故に願ひの意となりて

穏なることぞやかしハなき あんまされる。中の句ハ。人の心ハうつろふものをといふ意な
まで。ひろきの畧語とも異なる例なくまぎらハし。されどもの結びに
かゝれるハいふもさらなり。下の哥ハ。見ゆるべきことといふべきを。續々として
きに換へたるなれバなほ例のうちなり。これもそハ結びにはあらず。
たゞそのてにをはなり。さてまた。

新義 ちるはにこそかよひし拍をいろふしてよそのうらをれうきなるらん

同 きるかにこそたえし拍をこゞ月よふなどよぶむらん関の藤川

この二首を瓊綸に間よちかしたまへバ上のちと受るがら切まへしらく。下へたゞく格にとかきへり。と注されたり。おやまし八然るべし。然まで〻んなほそと結ぶ格のうちにいまはれたるハきとぶへり。さらにと結ぶ格とて。

躬恒集 ながむれバたまなくありぬ女郎花人しれでこそちるらんとそふに

金 いにしへハ月をのみこそながめしに今ハ日をまつ己が身なりき

此二首を挙て。おまへの尓ハ力ありく。めのをといふ意をふくめし。と注せらまつれど。これハこその結びハちるらんながめし。なるを上なるハとく受て續けるにく。前の尓ハ上へかへりく。ながむれバ云々へ係る意なり。次なるハ其ぶにいと續けるまで。此格のてにをはなり。然れバこれを尓ハ結びにあらずて。こそもと受る格。ともと受る格とて挙られたるハ。上よりそ結びをとなるらしくて續ける格にく。ぞもの上ハ常のごとくきめなるよりうけ。こその上ハ右行に移しる辞をうくるなどの差あり。とおるべし。さてまた。こそのてにをはをのぞぎる哥とて挙られたる中に。

後 あはれてふこと[こそ]常のくちのはにかゝるや。人を思ふなるらん

新於遠 かりに[こそ]わかれおくのわかれとなりにけりて人やわすれはつらん

この二首ハ。まことにひがことなり。次に。

六帖 こむといひてあけしよりもまたるれバまちねしを[こそ]待にまされる

蜻蛉日記 いく代をよぶ小山べのみねに[こそ]君がためふるよもひなれ屡し

栄花 玉のかざり わかきみにし中戸ハ人しれずかくされどたのまぶのみ[こそ]そでにかゝる

おほまつりをも出して。結び辞をかくすりといへきまつれど。上下の辞ハあらく。

まつまてかくまてどいひてハ語調よろし。すべて口にさいハそハに

くれやうなる語ハ轉し略きてもいふがならひゆく。かやうの格法に

かゝるべきことをいふかでなんあるなり。まてと結ぶハ格なれバ耳にさはりてやすく見もありぬ。ふるきふみにもさく

なぞ。うるはしと結ぶも。同じく調あしき詞なく。玉の緒一此差あり。三勝他文中などにも。

一首も見えざるに准べくかなふべし。結るを[こそ]と云へバかなしく。まてとさだめるにバかなそぬ

やうにやつくもあるまや。近きころの歌などにも。

をりをり見ゆれどかめるハひとごちなし。しかれバ此類ハことさと轉しかへるに

しくらくのをぬにハかなざるべし。中の一首ハ調ハよろしけれど。な係ちと

結ぶ類の格なり。但し[ぞ]ハ現在の志にて過去の志に あるべからなるや。いきしが中にもしれ。さきまバ。此のまじうらぬ

姿にハあまでど。そこむきにいひくるれべくもかゝるやあらん。さらひていそぐ

なれらをこそ。例の変格などいひもしつべきなれ。

○中行やかの二つも。ひとしなみ此辞にく物にふれてうつかへるやう此

勢ひあきバにや。瓊綸下その注せられたるごとく。其のつゞらんと激て結ぶ

が多くしるといひ治るハまでくなし。これぞこそと異なる差なきバ。

今かりに激辞と名けて別ちたり。そのよしハ上にもいへり。さきまバ此辞どもよわり。係ぞ

ゆゑなる下ハ。為るといへバ不為ことになり。不為といへバ為ることになり。将
見といへバ見ぬと見る意になり。不聞といへども聞べきことゝきこえたり。よろづの
事悉くあらず。さてやもかも共に。疑ふ意と。歎息く意と。二つあるを。
其用ひざまはのちすゑまで八。瓊綸に具くの例格を挙て。委くいはれ
たれバ読て知るべし。おもさまるに本のうへハ。男谷図義解にいへまバまゝよかるらん。其中に歎息のやとて出され
たるくだりに。

古　あしがものさわぐ入江の白波のしらず[や]人をかくこひんとは

新　うらみぞ[や]うきよの花のいとひつゝさそふ風あらバと思ひけるをバ

この二首もまじりたれど。このやハ激辞にて。歎息のやにハあらず。上の歌
ハ。よりかへりてかくこひんとハしらじぞや。といふ意。下の歌ハ。思ひけるをバ
うらみぞや。と初句へかへる意にていひ切るやの格なり。けらくかけ下に
かゝといふ格を挙て。哥四首を出されたり。これハ係辞にハあらざれど。
昔より世にうたに解得る説もなくて。初学の輩れ。聞まどはさる辞
なる故に。因にこゝにかきつけてん。さるハ萬葉集にがふとておほく出さ
る辞なるが。かもといふに似たりとハ。誰もまづおもひたれバ。瓊綸七の巻
古風部に挙られたる。證哥どもを引出てけるよしといふべし。彼巻
にいはれたるやう。がもハ中昔の世にいふ。がなと同じくて。かもてその料にあつらへける言なり。又
もがなどいふ。がなと同じくて。がもとそのかはりなり。もがもとつゞめてかもといへるなり。がもとあはち
がふハがもとともいふ。かくいはざることのめくるまでも。なにゝやうなるハしく
同じ意なり。」とはいひくさることの

くはしくと聞えざるべし。今試（コロミ）にその差（ケヂメ）をいはんとするにちかきより本ろ
おもろよりいひてハなかなかにわづらハしく紛（マギ）れやすかれバ。姑（シバラ）く俗語（サトビゴト）
にうつして用ひざるをも心得んに。（がくいひなすといふ本よりの意ハ畧図箋解に委くいへり）がね係ハデアラウ。がにハヤウニ
とくくわすりきざふことなし。

がにといふに二やうの意ありて。ひとつの形容（アリサマ）をとりてよそへいひたるあり。猶二やうに分れて云くハ其をノヤウニ見エル。聞エル。思ハレルなど。形容（アリサマ）をくらべていひ。今一つハドウ
まつに二やうありて。一つハ云くハ其をノヤウニ見エル聞エル思ハレルなど。共によくたとへまつりさまにいへば遠きの傍（カタハラ）に片かなしるく
如此ナルヤウニスルヤウニなど。私ふさまにいふまく。
志としる譯語（ウツシコトバ）にうち。形容（アリサマ）をいへるかくさまハ。様字を
かきて見わくるなり。其わかちハ係がふ意ののるなり。古今集よりこなたさまハ。かにとを
清（スミ）てよむあるひなれども。意ハ同じくて違（タガ）ふことなし。誰（カ）がなども。

万葉三 ますらをが弓末ふりおこしいつる矢を後見ん人ハかたりつぐ がね（デアラウ）

同十 梅花われハちらさじ青丹よしならなる人も来つゝみる がね（デアラウ）

同 きちちらぬれのはやしをうゑん郭公ほとゝぎすの冬になですみてある がね（デアラウ）

於布流我爾ト
アリテ連詞ヨリ
がふト變タリ
假字如右ナレハ
讀誤写誤ナ
トニアラスフヲ
思ヘシ

同 あしびきの山田もる子ひでにしもおもひたへよかると云る がね（デアラウ）

同十二 里人もかたりつぐ がね（デアラウ） よしゑやし恋ても死なん誰が名ならめや

がね□ハいづれも同じ意なれバこのがねハとて畧き准へてしるべし。かふハ二やうにゆかりあるに
彼七の卷に出されたる歌を悉く萬川集古今集巳下のをもとり出
がねガネノエハスベテ現在言ナレド是ハ將テ未然トナル定格ニサルモノヨク辨ヘサル故ニカル誤リヲナシテケル也

同八 秋田かるかりほもいまだこぼたねバかりがねさむし霜もおきぬ がに（様二）

同十四 おもしろき野をばなやきそふる草にあたら草まじりおひバおふる がに（ヤウニ）

同四 わがやどの夕陰草のしらつゆのけぬ がに（様二） もとなおもほゆるかも

同十 うまさけやまとおもくきに今ハ我ハ声のかる がに（ヤウニ） 来なきとよまめ

同 秋づけバ水草の花のあえぬ がに（様二） 思へどしらじたゞにあはざれバ

同十一 さぬ がに（ネヤウニ） ハ誰れとも寝めどおきつものなびきし君がことまつわれを

同十四 むろがやの都留のつゝみのなりぬ がに（様二） ころハいへどいまだねなくに

オイタハ
る去
ナレバ
殊ニ
急がへり

同八 長哥 おふるまちかれまよめく五月を近みにほへるぬ[がな] 花咲よまきり云く

同十三 長哥 あまをとめらがうなかせるひれもてる[がな] 云く白まへの袖ふる見えつ云く

古 ちる花ちりのひくまきおいらく来さんといふたるみちまがふ[がな]

同 なくなみだ雨とふるなん見てわ川水まさりなバかへりくる[がな]

於 山ざとよ去る人もがなかくぞたなぬときらバはなふくる[がな]

古 またむくれ行まで の山乃やまんべとひとも見る[がな] 山ふだらせよ

右のうち・印たけるハ右行れ係辞なり。此辞どもよりうけるよしを示さんきあるよ云のしつ。ちくがなの上ハ續く語より受け。がなの上を切る語より受るを古今集よりこなされがなハ續く法によりうるす定まり。これ古今此差なり。かるがなハ切る辞。がなハさべて續く辞なる

故よ語中かを務さるり。夕ぬかなよかとまなまかやるも声のかるがなきるのたとよからんの数おりましがなと云ふうるゝハ立くりて上の句へ係るなるべし。

これまでにてがなハがな[がな]といふとは約めるよハ。ぐるしざることを去る也し。かの后がな切がななどいふとハさるよ別あり。これまでそれハ人の心しらぬよして。近世の哥どもよハ此格をまもべくるもぞうべく守るハいとあぢきたなさわざなりけり。

出石居藏板

いとかしこき大御世ハよりぬらき浪志きなみして
つぎてきたる山よりくむ海士乃子ハおのがしわざ
してこのひおもてをなりにくるハよのつね嬉しき
まさなりけりし志かハ何事を許る敷島世にハ里
ゆくまでおもむきてはあけてゐれいふしき
おもてを見多くなりゆきてゆきくしを圓珠庵の
なかなり契沖法師をはじめ賀茂乃翁本居乃
をぢなどの道ひらきたるにおもひつちてかれこれさき

はちえたまれしかとてよそとえのてよにいろて八思ハ
まとたれへるふしをさりくなゝ疑ハれはらそうれ
うひ学ひのとれゝゝハさてよまいえをもよし此川
よしとみをおのひ語意なる人こゝろよれ枕なさ
きりれへちまとひぬるをとかのまふく六條乃
國人萩原大人はくえ年のあ此面は面乃志ありを
考へ盛垂わこを浅ち原つくゝに比あつちひて
ひくえくをう頼もてを捷の一もてちよめやもくれ此

せられつるは係辞辨なむよよ多くひなき
大人乃けつきありあるさるいら頼をとの世人
乃ころえいらしきさちとえさらちなるし人令
よりしていなふえ堰にまをむ力のよふれ
さやらずまとふてとなふく野中の清水との
たろろ哉くをも志利ていよまもくゝやひのわ
さみの國乃をよこち忍ろこうゆこのむたいとろ
うれしくて大人尓もろえてさそくふよちり

たらん世のゑまそけとえなさうしとこめくハ
一言哉なの世し

福田貞湅

萩原葭沼先生著述脱稿之部目録

本學大概 附録一巻	三册	玉篠草紙 隨筆初集	二册
萬葉集略解補遺	五册	西戎音譯字論	一册
弖尓乎波略圖義解	二册	同係辭辨 刻成	一册
住吉物語松風抄	二册	葎の葉まけ 初編	一册

近刻嗣出

發行書肆
大坂心齋橋筋安堂寺町
秋田屋太右衛門